



長濱拓磨著 『戦後文学と聖書―日本の近現代作家におけるキリスト教の影響をめぐって』 (書評)

祝, 影紅

(Citation)

國文論叢別冊, 1:122-125

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483229>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483229>



■書評

長濱拓磨著

『戦後文学と聖書——日本の近現代作家におけるキリスト教の影響をめぐって』

祝 影 紅

本書は、戦後という時代を中心に、日本の作家に見られるキリスト教や聖書の影響について整理し、考察したものである。七回にわたって雑誌『キリスト教文化』（かんよう出版、二〇一六年五月―二〇二一年九月）に連載された『戦後文学と聖書』に基づく。著者が「あとがき」に記すように、「キリスト教」のかわりに「聖書」という言葉をタイトルに使用したのは、戦後作家は非キリスト教者が多数を占めており、どこまでが信仰の影響であるのか、見極めるための線引きが難しいからである。

本書は七章からなる。第一章「様々な分岐点」においては、時代区分と対象とする範囲を明確にしつつ全体的な内容を概説したうえで、第二章から第六章までは各テーマについて検討し、代表的な作家を二、三名取り上げながら彼らの小説作品と聖書との関連性を具体的に考察している。第七章「戦後評論と聖書」はタイトルから分かるように、小説から離れ、ドストエフスキー・ブーメとイエスの受容問題を切り口として戦後の文学者と評論家を紹介し、それぞれの聖書との関わり方について検討している。

本書は、日本におけるキリスト教受容の歴史に並行して日本文

学史をたどり、聖書の影響による文学史の再考を試みている。十六世紀以来、日本の近代化に伴って広まったキリスト教は、教育上重要な役割を果たしてきた。内村鑑三をはじめ、新渡戸稲造や徳富蘇峰・蘆花兄弟など、キリスト教に感化された明治期の知識人、文学者は少なくない。だが文学の世界に限って見れば、キリスト教から深い影響を受けた国木田独步や島崎藤村、「切支丹物」を多く著した芥川龍之介といった作家が昭和までに現れたものの、いずれも聖書の主題を深めたとは言いがたい、と著者は指摘する。聖書の核心的な部分に触れ、それを自らの作品で発展させ、かつ文壇の中心で活躍した文学者が現れるのは、戦後を待たなければならぬ。著者の見通しによれば、その代表的な作家が、椎名麟三と遠藤周作である。椎名が「深夜の酒宴」をもって文壇に登場した一九四七年が、奇しくも遠藤が評論「神々と神と」によりカトリック評論家としてデビューした年でもあるということに注目している点は興味深い。

以上のことを踏まえ、本書は一九四五年を一つの分岐点として扱い、一九四五年八月から一九五五年二月までの約十年間を検

討対象である「戦後文学」の範囲としている。他方で、聖書翻訳の歴史に焦点を当てると、近代日本では一八八七年にはじめて完成された新・旧約聖書の画期的な翻訳、いわゆる「文語訳」が最も広く読まれてきたが、遠藤周作のようなカトリック作家は一九一〇年刊行のラゲ神父による『我主イエズスキリストの新約聖書』の影響を強く受けている、と著者は指摘している。

著者は次のように戦後の文学の主な流れを整理している。①戦前から活躍していた既成作家の復活、②宮本百合子などによる民主主義文学の出發、③太宰治、坂口安吾、石川淳、織田作之助などの無頼派の流行、④「第一次戦後派」「第二次戦後派」と呼ばれる戦後派作家の活躍、⑤日本の高度経済成長を背景とした中間小説の隆盛、⑥「第三の新人」の登場。本書は、②以外の項目に、それぞれ独立した章をあてて考察している。②の民主主義文学は「キリスト教とは一線を画していたため、聖書の影響を見ることはできない」ことから、考察の対象から外されている。しかし、完全に排除されているのは、やはり少し気になるところである。例えば、ここで名前の挙がっている宮本百合子は、私小説風の作品「追憶」の中で、小さい頃に叔父から聞いた数々の聖書の物語に夢中になっていたことを記している。彼女は結局クリスチャンにはならなかったが、聖書から与えられた想像力は何らかの形で生きていると考えられる。また、民主主義作家が教養の書として聖書を読んだ可能性も否定できない。その検証は、今後の課題となるところだろう。

続いてはそれぞれのテーマに沿って歴史的背景を概観しつつ、特定の作家と聖書との関わりが作品に即して具体的に考察されて

いる。第二章「既成作家と聖書」では、戦前から活躍し、一定の名声を得ていた作家たちが検討される。そのなかで聖書と深く関わった者として挙げられたのは、川端康成や堀辰雄、北原武夫である。大正教養主義を背景に、信仰とは関係なしに聖書を教養の書として受容したところが彼らの共通点である。彼らの特徴は、中立的な立場から聖書を文学の素材の一つとして眺めていることであると指摘されている。

第三章「無頼派作家と聖書」によれば、無頼派作家は全体的にキリスト教や聖書への関心が薄い。芥川龍之介と同様に切支丹物を書き、殉教者に強い関心を抱いた坂口安吾がいるが、聖書そのものの自体との直接的な関わりは見られない。しかし石川淳と太宰治は例外であった。石川淳は戦後「焼跡のイエス」をはじめとするカトリック色の濃い作品を次々と発表し、江戸戯作と聖書伝説とを融合させた独特な世界観を切り開いた。太宰治は受洗はしなかったが、キリスト教や聖書の影響を強く受けた作家の一人である。津軽疎開時代（一九四五年八月～一九四六年一月）の作品には、作中の登場人物の思想を投影させるものとして「マタイ伝」からの引用が多かったのに対し、三鷹での晩年時代（一九四八年六月）の作品には、「ヨハネ伝」「創世記」等からの引用も見られるようになり、引用源の多様化とともに聖書的主題もより深められていった、と著者は論じている。

第四章「戦後派作家と聖書」で考察の中心となる戦後派作家は、実存主義やドストエフスキーの影響の下、聖書と関わる者が多いが、聖書受容のありかたは多様である。著者の見取り図よれば、野間宏、中村真一郎、安部公房らは大正教養主義の流れを汲み、

教養として聖書を受容しているのに対して、椎名麟三、武田泰淳、大岡昇平の場合、過酷な転向・戦争体験が彼らの聖書の捉え方に影響を与えている。死の恐怖に苛まれてきた椎名麟三は、キリスト教に惹かれて入信したのではなく、受洗後に聖書を読み、復活するイエスの姿に感動したことによって、本当の意味での回心を遂げた。その前にも彼の作品には聖書の引用があつたが、受洗後、それが少なくなった分、イメージをもって聖書の主題を間接的に表現するようになった、と著者は指摘する。クリスチャンになった椎名は信仰に関するエッセイも数多く残しており、「たねの会」というプロテスタント文学集団を立ち上げるなど、戦後のキリスト教作家の代表格として活躍していたことが紹介されている。

次に第五章「中間小説と聖書」では、中間小説と深く関わり、かつ聖書との関連が見られる作家として、石坂洋次郎、井伏鱒二、林美美子の名が挙がっている。石坂の作品には聖書の言葉の引用は少ないが、そのほとんどが作品の主題や登場人物の行動に深く関わることから、彼が聖書を深く読み込んでいるということがうかがえるという。井伏鱒二はもともと聖書より、むしろ切支丹のほうに関心を寄せていた。それがきっかけとなり、晩年聖書を愛読するようになり、その知識が「かるさん屋敷」という小説に反映されている、と著者は指摘する。

第三の新人には、曾野綾子や遠藤周作らカトリック作家が多い。第六章「(第三の新人)と聖書」は、彼らの作品と聖書との関連が薄いことに注目する。例えば、島尾敏雄は洗礼を受けており、代表作「われ深きふちより」の題名も聖書に由来しているが、その内容はほとんど聖書とは無関係である。一方で、カトリック評論

家から出発した遠藤周作は、日本の風土とキリスト教に関わる問題に強い関心を持っていた。プロテスタント作家の椎名麟三が戦後日本のキリスト教作家の代表格の一人であるとすれば、その椎名と双璧をなすのが遠藤である。彼が「アデンまで」をもって小説家に転身してからも、キリスト教的問題を追究し続け、聖書の主題やイメージを織り込んだ作品を多く執筆した。

最終章「戦後評論と聖書」では、評論の世界において聖書と関係する問題として戦前から継続する「ドストエフスキー・ブーム」と、「私のイエス」すなわち作家個人の信仰表明の問題とを取り上げている。著者によれば、ドストエフスキーの作品にはキリスト教的な問題を取り扱ったものが多く、それが戦後文学と聖書との関わり方に直接影響を与えたのである。「私のイエス」問題に関しては、内村鑑三の無教会主義や海外の自由主義神学が背景にあり、非キリスト教の文学者が自分なりにイエス像を読み取ろうとする姿勢につながっている、と著者は指摘する。そのような文脈を踏まえて、河上徹太郎、椎名麟三、遠藤周作、吉本隆明の評論を取り上げ、それぞれが直面するキリスト教受容における課題、または彼らが描いた「私のイエス」像に具体的な検討を加えている。本章の記述で特に有益なのは注である。そこにはドストエフスキー・ブームに関する戦後の討論会や特集、評論書の情報が収集されており、今後の研究に非常に役立つ資料となっている。

巻末には「戦後文学における聖書関連作品年表」が付されている。戦後に限らず、一八七三年(明治六年)から一九五五年(昭和三〇年)にかけて、日本におけるキリスト教受容に関する重要な出来事および聖書関連の作品が網羅されている。簡潔にまとめ

られたこの年表の作成に当たっては、一つ一つの作品の確認作業に多大な労力が費やされたと思われる。日本におけるキリスト教文学に関心を持つ者が、同時代の作品と比較したり、歴史の流れを確認したりする際、本書はその手引書として大いに有用であるう。

時代背景を丹念に説明したうえで、戦後の作家たちと聖書との関連を平易な言葉で分かりやすく紹介しているのが本書の特色である。ただ、いくつかの作品に関しては、聖書の文言の引用は指摘にとどまり、作品内容に踏み込んだ考察が展開されていないのは少し残念だった。しかしそれも、対象作品を広く網羅するためには、仕方のないことだと思われる。また、本書は同時代の作家を横断的に見ていくという方針を取っているが、そのなかでも椎名麟三と遠藤周作の比重が他作家より大きいところに、両作家の研究者である著者の関心の所在が感じられた。本書は関連分野の研究者にとって示唆に富んだ書物であるのみならず、日本におけるキリスト教や聖書の受容史、戦後文学史について勉強したい人が入門書とするにふさわしい一冊である。

〔二〇二二年三月、かんよう出版、本体一八〇〇円〕
(じゅ いんほん／神戸大学大学院人文学研究科博士課程前期課程)